



第二號 外號

三十年

丁酉日記

自五月下朔
八月廿六日

早稲田大学図書館
文書27
A93
2



明倫彙編 家範典 卷一百一十五

廿日下 晴 三月朔 土曜

午前之所有免其推其為日之一年 未行

國庭掃除北堂中包可此 藤架紫葉充之等

能之與憾也(一)

法婦以梅而女之樣於本晚所地物之

吉物之有鹿者候掃之書以藉子之長持之要書

類之出(一)

片之解之書屋之引之其新葉家屋之圖

面之別於(一) 遂之德之不出戶晚乃可之命

北境より畑の間敷を取つて、手製之圓餅を幅
廣し、仍ち可希に彩り又今夕果に新に秋原
す

黒井師に來り、古の綴り名に改めし書あり
西花園より菊より鐘の聲あり持来

二日曜 四月朔 午後曇

予前七帖起園庭掃除

可き印圖面より家出する、船船月夜を二日後
と修行とあり。金子有仰言ふ、回會

大八濟遠艦より教島神社に砲丸奉納し碑

又、揮毫あり、一見漢碑に字跡を流し

上泉徳勝の廟北あり

午後山崎昌業の父後編縣令中非誠を中一有定
切通しと寓居と訪ひ、哲の語すは、是非眼何七心
流あり、自由海道あり、實心措別あり

日陰町木仏屋より、鑪金櫃を買入る事

野原より、洋衣大屋より、天より、と書きたる人

竹股行平、去る、哲より、四月三日、竹あり

三日雨 雨あり

新地辰徴助、梅林より、津比ふ、人の圓面を渡り

一坪翠田位、平家、
徳雨降、
書、表、
四、晴、火

早起、
午、
夜、

六十年、
其、
又、
其、
由、

六十年、
其、
又、
其、
由、

六十年、
其、
又、
其、
由、

時宗治武州歛道とハ五幸神を以て官
線蔵存の又人守歳益中昔也
横田所西萬を仰き傷日印を以て例と洋確
建立此を征也身然しやておと物らお物
人種混化之事と歐混きて
聖史の御身中と云ふをのらうんり先んお徳志
一部を照破しを波蘭土の也
新帝を滅れ今に波蘭土の
國に云ふと其人民お徳志人民と稱せざし
我の波蘭土の民を波蘭土の民とあうに

中一の波蘭土人民と申すは情愔思き波蘭土
轄の波蘭土人もあつたが波蘭土の如く
も波蘭土一統されたる舊土も自着る人も
はるゝ二千五百人(も)なり面積は鮮し
比より其情愔思き波蘭土の如く徳法英
皆然り地人の人種混化ももも言不可行
歟
土身古の海峡を種さ前日存十丁計り
一帯の長江に如く土身の都(コンスタンチノブル
海峡に在り歐洲に跨りて海峡を右亞細

洲より我黒江の武花に倭の島界を分つて
同じ希臘の昔の土身古の島を以て土身古
の祖の想を以て唐の突厥がらん亞洲の進
撃の勅種を國服程の島を以て歐洲のコンスタン
チノポリの建都せしもの歎
涼州詞の葡萄美酒夜光杯予サハベリヤを煙
過し涼州の近方と探探せしもの今も葡萄
盛植るに安あり
此の黒田伯と安自と歐洲の大勢を以ての盤
の景況を俟せし時を思ひ身次第次第を以て

隨者あり及漢の傍に樞密院の執筆
記載し扱ひあり果の地を次第次第を以て
行ゆ者
晩天辭去と西京より電報を以て伊藤侯
の者親王の隨行を命ぜらるるを以て七百ガナリ
船を太平洋洋より出せし自其英公使同
行ししに黄氏の邸宅
廿日
昨日の西階に西京の及種事ありし處に雨あり
東海に浪を以て破壊するもの延引しは

古之梅抄作夜建築案法入費書分結系
晚乃日有揚多買物之り御内材木在厨
ハ所多材木直段納書七分多
中華高に多知多一松の飲り年於材木
直段分多習位わ改行
ふん^ハ之の船多馬江及多事多和事大梅之案
子之買物り

同日可^ハ中逆信省より書付より拜命

宮島可二郎
任船舶司檢所司檢官補

明治卅年五月五日 逆信省朱印

船舶司檢所司檢官補宮島可二郎
給九級俸

明治三十年五月五日 逆信省

船舶司檢所司檢官補宮島可二郎

大阪船舶司檢所司檢官補

明治卅年五月五日 逆信省

船舶司檢所司檢官補宮島二郎

大阪船舶司檢所司檢官補
命ハ先ニ任東京ヨリ大
坂ヨリ汽車ニヨリ赴任ス

翌廿年五月廿日

通信大臣子爵野村靖

可二即知身より天性器械好む常々蒸
氣造船ホセ子製衣一愛玩也后と詔
八斗削庚寅三月母長哲あり未だ初
林就言の時可二即蒸氣車と製一室内
連解一白母と製あり母市の中白曰く可二
郎此方向をて飯喰いよ成ると長母初
りける折てく片より白田想をれと母の明察

遊心き艱が一一可二即為戲二十二年六月
あり

六月時

野長治を初后夕為祝之佳也長治の
大玩あり未だ山を多しを白の居を以て且菜
園を多しを白の換徳女の遊可
田途三軒を白の場多きを白の舞をヒラメセ
買耳活潑い山の子も跡あり獲切あり
福園紫藤花盛開あり白の多しを多しを
ありありと多しを多しを多しを

瀛奎肆 隨之 杉正之 化晚嵐之筆韻
瘞佳本可

午後伊豆子之伊藤之節心吟之玉及七見其の
九時日留唐車坊之常車之ヤ
黒留之病を以て於此の時伊豆之病坊之ヤ
之事先其去る方伊豆之病坊の親王之遺葉木
使と尋ふる事一王より此夜日行を乞ひ置りて伊豆
の節以早し降之に西京之方聲外におみし候と
可身之節り切廻之候と此候一と片は安王片
西京に電話を以て候は上り置り候は如何あり

理由處の口所と留むれり迄電之節候
ありて之親王の出入りありて此京の處に上
初候ありて之許有る候しこの伊豆の候あり
と口可なり之事一黒田と云ふ者なり

黄會り長政事由山下廿七歳久為事あり
可市任選之祝事あり候と皆々漸候と事候
由教

片々之張海の七八お振る身宅羅羅候
之子之身西海船を罷考せり大山沼津
別之持之四明高之節事あり候なり

西村亮吉千坂之雅男子花柳と秋不兄弟長政の相十の節

八日土

午前材木の調へ栲林、先づ一帯を栲林と云ふ
たす可い言沙十日可い言沙九日と傳、差也
最一考す也

可き、黒白の野村逆信在信船向長
廻礼法年十、黒井の夜、夕雲の内也
晩乃刀流、田舎新、女言も於、そ風も亦
軒中多、功途に及、條、教、お、ゆ、也

九日晴、午時雨、降、初、及

早天梅坊の本、し、も、卯、の、元、大、者、の、中、

地、形、を、ら、し、の、娘、の、方、人、未、知、り、中、日、

於、此、の、方、人、未、知、り、昨、年、焼、所、尾、也

町、ら、し、の、方、人、未、知、り、昨、年、焼、所、尾、也

今、年、且、殊、亮、町、材、木、の、事、運、送、中、也、

古、知、り、渡、意、を、ら、ん、事、也、此、也、

湯、谷、使、抄、度、譯、官、置、度、點、今、年、迄、是、所、而、紀

一、可、い、の、遊、睦、を、作、り、遊、移、轉、す

年、終、り、可、い、の、遊、睦、を、作、り、遊、移、轉、す

伊、の、吐、才、の、初、也

中村榮郎北

昔何年、と恙持つて安心

中村榮郎、九死して、かゝる来、肝膽初

〜 昌子榮一、り、り、り、

張海子山、下、移、特、公、使、館、と、出、り、何

者、を、毛、一、音、同、き

踏、元、町、村、木、代、價、二、百、十、山、を、以、て、

付、新、村、に、移、る

大、八、片、山、生、の、祀、考、を、以、洋、倉、海、島、

お、也、と、廣、田、に、弟、と、を、新、村、の、以、て、

扱、り、を、之、以、て、山、と、し、

古、時、

23

と、終、つ、時、起、去、方、九、来、地、形、經、營

中村榮郎、の、智、彙、二、田、大、八、一、田、と、を、り、大、八、

州、と、出、す

目、是、の、来、祖、母、之、五、十、年、終、り、十、八、と、終、り、り、り、

有、念、念、の、元、年、申、り、り、り、り、り、り、

お、也、と、油、宅、を、お、能、く、お、徳、を、り、り、り、り、り、り、

同、行、所、家、と、申、交、懐、好、み、を、り、り、り、り、

本、に、一、丸、を、り、り、り、り、り、り、り、り、

徳、り、海、大、中、の、身、代、と、申、是、り、り、り、り、り、

徳、女、受、濟、田、
之、齋、素、非、懐、
娘

古歌之徳也矣

土方地形平均海梅林水盛之事

且四出所明築之海す。西洋有之他地置去三方極多

晚乃材木坊系之土基檜ノ木二本と石直

乃木ノ森車抄居之矣一以之十年好之

と釋み也

新湯入流

十日陰雨不雨

木

枕上可云即大坂及之書信来十日乃吉屋九時着

翌年創者共發車之時大坂着也

留田銀行より 二十五百廿四ノ書焼より波より

土方八人餘り来り地形に礎石を拵へ咽突流す

天より滅多都合海し片の地形今成就す

檜の木二本有之二本取廻へ持回

海の中人來り其境に柏枝を切り建築石切

且檜木一二本を載せたり

竹流乃来り指の佐し海

保科忠節の墓あり此の山に在りて古く出

是并ゆふに大坂より宿物扱の所と云ふ也

十四日晴 福臨寺書

金

号好之
十之佳
日春之
有信也
金之英

之其考七人足之不来梅林之呼以信厚
之其考大八之其考也

岩田銀行借入金之其考也

大久保町内務卿之其考也

何進之其考也

初之其考也

時話之其考也

之其考也

除平太源戸薩摩守之其考也

借用之其考也

之在陶種、稀也、者監選也

切定之其考也

多取之其考也

一二之其考也

作一之其考也

達之其考也

株之其考也

此所之其考也

之其考也

之其考也

山之其考也

総額約百
百乃の
成りゆへ

神奈川八王子鉄道の私線なるが爲め、
間接に該路に利益のありしを以て官線なる
極端に利便を失ふ爲利益を以て第十
議會の貴族院を以て否決し官線に過
過すに武州路已成車を以て高崎より考
まて二十里を爲橋と爲車を以て十二里を以て
計額二百四十萬を以て中成迄を以て
世を政府を以て飯沼を以て官線を以て
甲尾中央の諸器運搬を以て神奈
八王子を以て人民の願を以て私線を以て

とありしが

偽目的飯

目的を以て飯沼を以て私線に中成
官先の中成を以て飯沼を以て官線に
業者を以て飯沼を以て私線に
之を以て千坂を以て私線に
人且千坂を以て私線に
之を以て相談會を以て私線に
之を以て私線を以て私線に
千坂を以て私線に
十号
里井中成及び中成を以て私線に

之身事進返居死之味大増漁船の港
多中回航は故彼方より船中止ありし中
荷物の差出法大人より飛出するに取付大八
荷物之固めを局日有揚小綱可三目尾城固
湊局より法文と年月相大印車より荷物の
きり

可三印の娘より書より幸より荷物のきり
物三の礼より出きり
おやと切徳より揚本より新 寂然とあり
おやと濁着の勝経大さきと年より一頃の早き

大磯 の 幸より子部へ徳より行あり

大八安田銀行の事。梅村より。午後より始り
十六日 雨 大雨 晩来所 日曜

雨職人石束材あり来

と舟直方妻と年長婦と妻と業内よりおハ代り快
つと又来 晩方より祝儀之目と鯛と連枝系青山通
悪徳の余と閉りあり おやと長女とゆゆゆその他親戚
婦人あり 相より通内宅

大八柏木、世間より友人の口より通し 酒と肴の金銭
金二圓の幣あり

余あり及び日活契益親睦と學び見よ
丁酉正月十七日訪明學省相談及后
日學省首相忽有二句余以前高
奉_上答
兼_上部_上送_上是
唇_上蓮_上相_上持_上豈_上偶_上然_上從_上行_上西_上國_上貴_上歡_上聯
欲_上知_上聖_上世_上興_上隆_上心_上清_上見_上明_上治_上三_上十_上年
と_上口_上に_上熱_上め_上物_上を_上時_上の_上舉_上國_上中_上騰_上死
あり_上長_上子_上。松_上方_上嚴_上と_上由_上訪_上ふ_上と_上切
靜_上と_上考_上る_上存_上月_上中_上滿_上夷_上船_上を_上引_上り_上て_上中_上
大_上抵_上屋_上底_上に_上す

十日

火

目黒忠行祖傳五_上と_上本_上高_上祭_上と_上由_上の_上祝_上風_上と
七_上女_上の_上化_上の_上身_上斗_上元_上の_上日記_上と_上を_上一_上と_上此_上日_上皇_上祖_上傳
此_上中_上あり_上高_上と_上河_上べ_上一_上教_上あり_上下_上傳_上と_上確_上乎_上の_上七_上及
為_上目_上忠_上の_上姉_上お_上き_上ふ_上耳_上と_上夜_上を_上追_上物_上物_上を_上
大_上工_上の_上人_上未_上材_上木_上と_上り_上者_上
可_上不_上中_上後_上来_上
火_上傳_上の_上十七_上年_上あり_上午_上の_上名_上縣_上の_上女_上の_上娘_上あり_上一_上等
火_上の_上一_上有_上り_上里_上辛_上酉_上の_上女_上と_上す_上時_上り
抄_上能_上ふ_上身_上の_上切_上や_上一_上脚_上部_上迄_上と_上す_上と_上あり

十月 恒古卷 昌氣

水

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

治三十年

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

朽乃何寓其 一 亦之 亦之 亦之 亦之

海東白首相向

玉美出 氣 氣 氣 氣

勝 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

大 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

層 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

歡 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

治 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

朽 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

角 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

三 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

海 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

玉 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之 亦之

古物抄を以て傳記の材を採る事あり
分^家相^かも定むる物に之を著す^{傳記}に
食^をふ

本所三浦の物も古板の傳記に準ずる
け人相を多し三代之傳記も今相の初記
可なり古板に新文初記あり

大工の事。本所^{本所}の材也

園庭掃草枝出り。晩來本境に土を
一記の晩辰。日本銀行に岩崎國助會、
木

二十日晴

早起命に命の玄關を洗濯し自ら
日之採草をあり

昨松乃し。紙片の差出

昨斗買ひ古板を物置に入し土蔵破
揚り。満に揚り木厚板二枚を
く。此板を昨斗の柱に引板あり

大工四人來土蔵を假敷

今夕九時。黒田總理宅に汽車
西京赴く

お徳(牛)大磯行とお八代と定む

二十、晴

大工六人來柱削

早起園庭掃除洋館之板壁土を洗濯

大八才木より金津、河原の相館、露西亞等

諸名様の勝翁、額字を柳舟最上之板也

来り、勝、院人の中より

大八番、あり、三千五百圓之金額書超借

場とおぼしき、先方より我家に

運利を譲り、二十五年四月、有借書等

九百五十圓、新借書、まゝに家計に取ら

之然に及、珍記の後、金、銀、金、局、取、り

あり、引出方、之、記、り、り、り

鎌倉河岸尾師、之、新、尾、之、相、場、高、金、り

土身古希臘、四月廿日、宣戦あり、西國公使

檣、開戦、處、土、軍、勝、利、今、日、之、希、軍

列國、中、裁、り、入、候、勢、り、土、地、下、償、金、之、土、身

り、莫、大、要、求、候、勢、り、り

獨、り、別、構、あり、露、之、隱、死、は、希、臘

之、故、を、持、り、兼、り、土、身、古、希、臘、を、バ、又

希、臘、に、属、す、る、中、間、之、權、衡、を、維

廿二日。大工六人具

夜半。強風撼屋。目覚。不能寐。床頭。推書。あは。空より。再就寝

二十三日。強風

非常。烈風。吹。黄塵。新。緑。芽。生。る。

と。新。勢。字。々。し。思。田。之。西。京。行。々。徳。の。配

即。上。西。京。市。頭。聲。々。也。新。勢。東。京。麻。病。之。為。め

あり。新。の。仍。白。南。々。也。思。田。之。西。京。行。々。徳。の。配

二十三日。西京。着。着。々。々。也。

麻。病。之。為。め。可。不。也。思。田。之。西。京。行。々。徳。の。配。一。張。三。國。之。求

あ。還。り。終。々。築。地。二。下。目。失。火。烈。風。中。大。騒。々

區。役。所。々。々。大。西。本。願。寺。々。蓮。花。殿。一。火。々

自。々。以。之。消。滅

午。後。之。時。助。達。若。崎。御。國。御。會。々。々。々。々。々

法。而。出。世。園。中。郷。御。々。々。名。業。為。住。々。々。々。々。々

山。縣。西。郷。大。隈。擇。山。為。湯。川。上。操。不。法。浦。御。會。々

地。村。上。之。始。々。々。成。盛。々。々。官。民。之。會。々。々。々。々。々

應。々。々。晚。天。御。花。〇。大。工。六。人。具

相。長。政。寺。為。お。お。上。明。大。磯。行。々。見。々。々。々。々

坊。徳。寺。為。大。八。山。下。々。お。八。代。代。々。坊。徳。寺。為

之義と云ふ山下母誘子と云ふ所は二十箇
を借用し之を○安田記の○大八求物
二十三日日曜

時方也上於十時以是頭痛按之
歩時頃より於徳文花日行方城に向ふ大八
新橋下迄十、九條裏長段、乃と云ふ
大二年、

可六印書状達より大坂致出物より一
紙全一張小包より糶所印便に本印之
物より一紙小包糶運込代き

可三印は端方南台より出
廿四日早朝由

大五葉 大八安田記より三ヶ月前
借用証書持来りて、其の引出初
金に不承者申す、其の、乃と云ふ証書
此の先の世に大八安田記、自先
中一書詰料、乃二家計、乃三老徳銀、
未取合也、其の、金、乃用、乃安田、乃九百、
圓、借用、乃証書、乃其、金、乃備へ、乃
以、乃法、乃易、乃見、乃所、乃定、乃地、乃所、乃在、乃其、乃以、乃交、乃

田舎者との取引書起す所は月一四
利を以て取らば百山を以て割る
之を以て割るは一切を以て得勿論也
時と時を以て計るは且物也
正銀行の爲に取らば取らば
物に七折り計るは取らば取らば
書起す所は取らば取らば取らば
のて取らば取らば取らば取らば
と取らば取らば取らば取らば
計る所は取らば取らば取らば

可なり感云
之なり感云

層批屋の事也、之を以て計るは取らば
借辭を以て取らば取らば取らば
取らば取らば取らば取らば取らば
務者、不為る情取者自ら取らば
道に理するは取らば取らば取らば
取らば取らば取らば取らば取らば
張洽家から取らば取らば取らば
取らば取らば取らば取らば取らば
取らば取らば取らば取らば取らば
取らば取らば取らば取らば取らば

訪今亦あり中、予方あり。○長谷末着、一見
お徳大藏と語り、事々明く、午後、訪
着、坪、○晩方より雨、成。

二十日、晴、陽、正、夜、来、る、者、雷、吹、つ、大、明
午、前、坊、元、町、木、引、一、人、年、暮、初、中、世、世、人、不
足、足、路、亦、取、ら、り、中、の、梅、林、下、を、行、き、て、柜
背、割、り、段、多、く、下、り、危、大、八、自、ら、り、り、能
と、之、以、て、今、の、日、序、を、初、め、給、也。

予、好、留、ま、り、町、終、止、所、を、見、り、刻、而、果、り、人、不、来
新、ら、安、田、と、い、ふ、人、交、行、者、と、い、ふ、人、と、同、じ、

多、故、人、と、り、伏、巻、お、く、不、三、十、四、上、部、者、也、○
金、額、を、送、り、寄、り、身、の、田、受、え、り、為、珍、記、と、同、じ、
明、之、段、と、中、に、り、

お、也、と、云、然、耳、の、流、車、中、に、禰、江、中、新
大、藏、と、い、ふ、人、氣、分、も、重、な、お、り、身、の、田、受、え、り、
し、ゆ、多、都、亦、り、何、中、坊、徳、多、く、元、氣

昨日、と、云、即、料理、と、云、り、不、測、と、傳、い、敷、回、還、不
祝、三、脚、氣、に、氣、味、を、林、籠、心、疾、息、

二十、日、好、晴

可なりと申す所に出る上は信末の好む二所
大坂の夢枕大雷のちりあり

書状よりお返り後改り有物商船會社
自身にまゝに申すの申す也

區得の家屋税と取人の法税收納
の建ち果ておの餅搦布を儲蓄付
たり

二十七、左様大倉大安方表の 一箇
餘り大少本、おのちの建ち果てお
大推り、おのちの建ち果ておのちの建ち果て

日本
如所

日本河内地方は、三羽、素、鷺、鷺、鷺

長谷の山、おのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

おのちの建ち果ておのちの建ち果ておのちの建ち果て

建初も無常 五言 一 西陽あり
とて 大業 榊木打方

予故曰竹垣と里角西京此故以希希とて道更なり
白多志相十箇と計り此等と陰分求の坊未だ之為
沈重なり松石沈重計坊内河と出頭と相仕舞清事
之出考銘河多々之天の字并故京都府の有り之為
事高僧事坊とて長崎書記寄出更なり 杖在りヒ
陰の首昂 陰の干前遠慮し干故坊内と地
上故の坊長之注意よりある内と地
之坊上二の坊 皇居此の坊古の坊と云海
に

此等北の坊は南に書記

相及是より却所大 初望五二十一日月物上清并 若思
里天所 出清并拜い 真生友二十二年方所
此の坊あり 京都の氣候の坊あり出所此坊
此の坊あり

兼浦の解集を對的夜の坊此坊

事故ハ節不の上出為之坊の坊夕長夜を道
原を坊を大ハの生居集坊歌坊の坊

可なり此坊を坊あり、事あり、

二十一年

予初日産坊と系池電之屋外カレイサを此坊也之

料理の口を食ふ一々村田開元物之譲り多し勝
也小の端々を後出

年好之故二十五年漢軍より大抵少妻女子同不漢軍
の如く操山の集談を尾切山おのひとさきし漢軍
と云ふ尾のけをより酒並古川希家より極少元と云
後事多所かりて平之種といふが相違人元論説
ゆか大抵長村の果をさして一田中ひさしを發進
仰らんは漢軍子運を勤まへ人食園切といふるがし
鑑毒の件はさきと工業家農家家と云ふ
漢軍漢軍の病を農家の鑑毒初書と云ふのさき

工業家の農家家許成許の屋を賜と黙過し工
業家鑑毒を漢軍と認得し以爲七亦農工業家
の古息を黙觀しゆかふか身や何れも中六年に法
水二十五年又の漢軍に洪水河底沈溺の故
と新却と田島と漢軍に洪水に死せ居る毒地と云ふ
はまの合辭を其内務省に保書して農工商務省
に通告し極のおもむきを拘る内務の衝動のさき
若幸を承りしや

棒火片刃の不刃を不思漢軍といへん其作
夫新の七年に漢軍若く報告ありて其年口は

邂逅相逢縁亦高
乃公廢在我能知
一晴
一雨皆天意
恰為未考成
精熟時

此詩去歲九月十日

十日風之甚
綿綿多花皆
他日也
初秋
初秋
初秋
初秋
初秋
初秋
初秋
初秋
初秋
初秋

三十 野馬多風雨歌

日

野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨
野馬多風雨

天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却
天柱回別却

つれづれ成り行く人
秋
秋
秋
秋
秋
秋
秋
秋
秋
秋

乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中
乃竟我年中

如志の次跡を海の多あり侍うて

あはれとくふ秋からぬまゝの世なり

鴨打らば海にむらしり侍りて

二杉廣く浦をさそ暇に相別るる友は波

浸天水あふさたれは島海中に侍りて

金山志遠のつらき右を暇に侍りて

は山志遠のつらき右を暇に侍りて

くは親を畫圓くく

山と海太し徳を奉るべし侍りて

はあそく子情を認め侍りて

蚊三三三のつらき右を暇に侍りて

晚酌の暇就寝可なり侍りて

難居多き自物多き侍りて

甲斐文彦ふも海四十八侍りて

歌ハシゲキニ十六侍りて

三王の如時

青山集繁く侍りて

和歌の如時

存月も初日経書と胎の先つ意に

子緒に就き侍り可なり侍りて

と流着侍り侍り侍り侍り侍り侍り

大隈外相を三三三
日夜西角侍り侍り
侍り侍り侍り

大城、開考
 杉本、良方
 梅、道者、唯是
 山縣、三島
 伊藤、芳川
 馬、市、大隈
 白、木、錫、島
 樺、山、後、道
 林、之、原、也
 杉、本、作、之
 梅、原、不、能、續

と為るを慮願す者、其の旨も、一家之大方計、尚
 且、時勢、之、變、らるる、機、會、之、誤、を、全、す

- 一 借田、金、兩、不、償、却、之、件
- 一 半、河、所、部、之、金、却、之、件
- 一 路、老、所、金、却、之、金、却、之、件
- 一 半、部、之、金、却、之、件
- 一 借、財、金、額、之、地、段、之、割、者、之、件
- 一 其、可、否、之、評、議
- 一 坊、老、所、貸、付、地、代、増
- 一 十、子、日、毎、地、代、増、算、力、之、機、算、本

一 近、傍、之、實、地、地、代、増、減、の、り、之、機、算、本

増、算、本

新、邸、以、家、人、之、持、入、部、分、目、指、六、百、六、百、目
 新、稿、就、館、新、く、海、を、字、出、七、山、形、浪、打、際、之、西
 之、庵、を、之、由、一、町、立、庵、を、小、休、家、人、等、西、行
 虎、御、之、儀、を、拜、し、道、行、を、受、め、

西、行、の、由、免、る、時、代、を、諸、京、師、持、之、理、之、武、士
 西、行、の、儀、を、免、る、と、稱、し、免、免、の、儀、を、免、る
 と、稱、す、皆、其、取、入、佛、門、由、人、不、好、り、免、免、者
 多、西、行、と、對、免、免、一、高、嶺、山、之、儀、を、免、免

刀を解きし隙を窺て西行高麗に引く其免
と訪ふ夕免之をも過して正繼坐より身有
法儀西行に去り夕免之をも送る飲仰不帝
亦子胸懐し夕免之を東國真如と見て
そ折ひて回より夕免之を西行に身見究徹
乃其ありあらずと嘆き道に多身解くあり刀
を把り西行に傳ふ彫刻を以像印と名する
西行の十四歳多治二年に像と稱す西行に友
師を辭を懸然と一の書子を縁と断ち東
海邊より三十二年回國と稱し奥州赤

衡館に引く時勢を論ゆ速鎌倉の事案解
回せし頻りにあり月十年を鶴岡の湯巻
諸に於て一鳥舟を造り田原の光僧に
あり以して認め何人ありて回ひて西行法
師あり真經館に館を招清平の天下一大機
を回し又夕免より馬に術をも討中法士よ
徳阿の銀猫と名して之を討す西行
秘教に確と出て門ありて兒童を擲す
と去り大機に引く河老松枯淋を深
造り替へ立ち引く又深し鴨を飛ひて

けは心なき身は情下の歌とありとありけ
鴨立海に名蹟あり入口の噂を先づき
花を柳に礎を築き江に以て庵を築き
手は海をこぼれ又西行もあつたて
る初めはつて踏河も長者林に派道をも
邊は柳に切らぬ柳に柳中田に
考九日ある海と言ふ一老翁ありて
おき多利の書も只在此山中海にあり
あつてもとつて言ひ古蹟を人考ふ者七

書
九日ありて
言ひ
あり
あり

歐洲の飛鳥は好む柳にありて人
布蛇池の葉を移す柳にありて人
眺天ありて妻を移す海にありて人
橋上関眺眺天遠海帆影如飛鶴
眺天屋後山上招仙洲登海上江島
在高手中絶景不可言むる鎌倉入
口とありて美に仙洲ありて不負
眺天長艸柳ありて美に仙洲ありて
午間海上白帆の表映せる舟の渡り

そのあり徳子ありを此躍分る

六月一日火曜

とら

招仙閣上銘喚と朱女と出つ馬田と業
夢と快と白ハの余吟瓏陸乃在子
まは波波漫々深ハと業と業流ハ山在
目不死と神心と我亦去ゆ

人土先と波神氣法来肉飛尸解人
君自女と想と非ハ

凡一代之功と吾もあ不世出と偉才ありと
千辛萬苦と業と積むとありこれと切

ちる多と難し大概の始めありと中道と沮表

一と一と誠とありと天地と化育と助

け家物浮成し業と道んともあり我身

と業との性を忍以心と物とありと可し時

ありと身と業と一と時と一と融膚と誠ハ

之とありと皇天と恩恵ありと之と業

伊と水と接しと之と業と一と之と業

通の上してと階梯と取ると精神と益と不

撓不屈と域と到て故と志と達とありと予

片六十碑と一と其の成唯一片と丹心と捧持

一十歳より多々漢二千歳軍事に當り二十歳國
難に當り四十歳五十年歳官金に頼るに後
涉る六十歳之年月を経過すに收十年
七十之為數に濟るべしとて往りと追想を
日そし千緒を端筆に考ふあり

書以て報に新了其之を要い論以て財政
金融のありあり

大抵有る金融のよまに監督権を有るに官制の明
く又規定を所あり目い金融のありあり勸業
銀行株式僅々千八九百萬募集を遂て減

切り引締りたる實に民間に資本の缺乏を不
才暗雨針あり而し其原因は金一億五千萬圓
の軍費を民間に吸収する毫も補填の道と
稱せざる罪なきとせめざる取寄たる償金の一部
有りを割きて軍事公債の償却と為る今日
に必迫る感せざるべし或は斯此等巨額の償却
を為るに却る金融社會に大害と與ふべしと云
ふありと元大元のなきは金融社會を幾分
に補填たるよしあり止まり財政を勿者に宜しく
為るべき道あり一且一國の要する資本を自ら

限るおれは資本に對する需用を満足せしむるに再
中央銀行に依り來りて資本に需求の常平
準を定むることたり世に通貨と資本とを混
同せしめたる通貨の膨脹を以て資本の膨脹を法
解し以上通貨を増加せしむるは如何といへば如
何通貨ありしを金庫に蓄りしを土塊と異なら
ず若し金融社會に溢る資本をばらば現行の
通貨膨脹ししよりは假令其の爲をばらば
膨脹したるも中流社會の購買力を増し
る奮修品の代價を變じたりと及し財政

計畫の要する經費を徳らるる國庫の出入せしめ
其の概り遊する物と爲りたる運轉資本
の猶も幾許なり通貨の爲に於るに億
とするも吸寄せらるる軍費の一と埋合せらるる
軍中の債償却は埋合せらるる金の
緩和と湯の法なり或は外資輸入の必要
を説く或は公債償却を爲さばるる老れど外資
の現行輸入の多き非ずや本年一月以降の輸
入超過額三千三百二十八萬餘圓の巨額を達
せり然る日本銀行の正貨準備は毫も増加せず

政府が日本銀行に預け入るに運輸資本之用を
供せし當稅收を減らさばき利子を損じ金融社層
の繁榮を度外視し得らば國庫に爲るに遺るが
爲り此筆法を行んば何千萬圓の公債發行
の要となり外資の輸入も亦金融社層の
毫も其惠を淋せざるに大減資果し金融
社層の忠實なるやと云ふ經濟學者あり
以上は流し是非智分らずと修め當爲る財政
力と考ふるに能く後述す
十年前の年分の汽車まで大減資者一正午據漢

三月十日の新聞稿を看す 薩摩族突風強んば大
蔵に朝鮮雲氣の世界と云ふ字を添へ
伊宅直六田金電信の起るに白大磯松
山岡の在り。○
と好む故に田金電信の便電報未
二日卯の白
於島町に多少の事ありて近者より立
寄る所より出たる所隔絶の間絶たぬ事
書類の中心相下りて澄解と物子の
地代増やると物との

初年書
之近況書

所夕割田由之天劍振之奉旨之田者
之為辭系身大ハ新橋を以て是に對する
中地知事柳井方々りて言ふ
初年書之天不平候初年書及之末
家上長井雅楽未得之長井細上
天成年書之天不平候初年書及之末
之書白也之自分之流の如き書し
毎之流の如き書し能也之
之由國信濃初年書及之末
之流の如き書し能也之
初年書及之末

初年書及之末
流の如き書し能也之

初年書及之末
流の如き書し能也之

三言晴み雨

初年書及之末
流の如き書し能也之

樺山内相官舎を叩くに感し、
大工来著法所漸安
晩方お代文花大職の切宅大八新橋と
お徳を中へ切。古職。言ハ新法と解く
中事と解く。

四時
お子来。堀老所聞知る来。地租地方税法等儀
等法不費せり。書物と様圖。又地代収入高り
亦不費人給せり。様圖了
牙後古版地代收納。堀老所。地價業

地由三米
と和。一
東山。地價
公積。一。西
五米。村。切

此説様書院
問題。起因

際哉許を。四。古。初。白。一。知。東。西。園。信。多。確。定
おへし。地。徳。三。高。米。七。持。主。三。様。方。切。り。之。儀。也。七。高
因。大。丈。又。切。り。一。の。九。七。高。り
材。木。屋。高。切。り。各。多。少。一。の。地。面。通。儀。表。坪。大。八。四
十六。圓。切。り。表。坪。九。割。切。り。一。言。不
此。の。勝。多。切。り。多。少。之。儀。黒。田。音。切。り。多。少。物。野。取
り。し。弟。子。之。高。切。り。一。の。切。り。之。儀。仲。間。内。の。切。り。説
おれ。を。感。然。然。り。ん。
お代。山。高。切。り。多。少。一。の。長。切。り。切。り。多。少。切。り。説
也。

昔

五

おやと山より王前へお次仰。

當所お鍋野茶之新鮮なる一匙賜付入

来り申上りてお急ぎに御座り候へば

之候。

可なり申上り候へば、伏せ奉り候へば御座り候。

お物昨日午時、お大坂商船會社より日社へお傳附

添付申上り候へば、安心に候へば、御座り候。

お坂九段二階へお移り候へば、お急ぎに候へば

之候。お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お面會お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

歸宅田鍋氏へ、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

お急ぎに候へば、お急ぎに候へば、お急ぎに候へば

能事遂延至下竟二千丁。丁之船舶日檢所送附之
丁年

大之来。終。何海元調之整理

七日雨 日曜

取調七十年以有負債百兩迄振置也
區別終。元調り子

七年より十九年迄負債為八利子

一金四千日也 利子三千九百圓七十兩

二十年より二十九年迄負債為八利子

一金壹萬千五百廿圓 利子八千五百十二圓三十兩

一 壹萬五千五百廿圓負債為八利子

利金壹萬千五百八十四圓也

其。按田所。初借金

從。省銀り。借金 三千日 一十年内 三百三十日

あり二十年以内五百日あり三千日あり。負債何れも在り

晩方艱々買いさす。意み野葉を料理風味俱全

七日雨

大之来。午前高浪あり雨乃梅も若く始り

已に梅雨天。日は入り夕日調り也

大八好唯伸歌及部以友より全権に傳へ榮轉伊タリヤを
初り命旨より賀祝し奉り

古縁乃者大八より此の御内事務政正權任
一高敷より申す御座り人より力に叶せらば御座り

しや

晚方より長政より家計を誤りたりといふ申す
雖新来り出納大御事より御座り御座り
又政より御座り酒を飲せり

八日晴 大

晴日 是に村田藤山錦合日昇より申す
尾師尾師より申す

小物冒業入来り此より御座り
公傳送副より一廻り申す
賜り給へり一談悲壯御座り
少好者より御座り

方後より好層御座り
金子より御座り御座り

大寺より。西花園より
思田御座り御座り

味甚職より御座り

九日晴 吹雨

尾師身、新定より乃尾を上げ仕舞おくり奉定
之殿尾より精々草掃り、新尾の十六枚り
入四人奉。大土未、二日間、大引と申し
板を張り上段、天井板、壁千板を打ツ
書齋上段二日間、六畳、書張り、とあり
祝花咽涙、痛み臥不承、為候
長政三郎、子知、上面を、移座、おん出立、
奉。十日、間、終、極、感、三、中、
下之根、太敷板、七張り
十日晴

長政、只、今、出立、と、奉。普、清、迄、七、出立
大業、着、手、以、来、三、十、日、の、成
巡査、在、拜、と、奉。手、話、前、三、長、尾、と、申、即、祝、花、在、奉
と、言、小、子、宗、孫、木、栗、津、と、者、あり
坊、如、寺、清、梅、と、申、屋、敷、温、泉、に、行、く
晩、乃、り、老、人、居、り、と、改、て、行、く、山、幸、不、採、茶、以、掃
崎、寺、末、僧、祝、花、由、改、敷、歩、詢、定
寺、晴
午前、九、時、目、覚、不、能、寐、中、覺、起、臥、水、盆、に
前、掃、美、川、并、板、屑、之、洗、不、大、八、早、起、掃、出

昨者建徳以来以屏之洗濯車取抄等
中書

可之印九分付くも紙片名物七葉一を飯九部
も新出物と物多到書言く可之印之他處有到
り

家計に送られたる古物と呼ぶ不來何れ新造習
へ一〇書寄中二書紙片子孫抄手書。晩辰に
差出り為る書物。相食相酌

十二・晴 土

書年副抄本。所食と乞ふ年加ふ。臨佳候

北

吉殿五月中謹慎勉勵。又左月月初より教
情氣と申す。八日小森澤に集り。是日候物定
不致其令。成坪學校。生徒三名。浴屋に
失踪。此より大八能名。捜索。中。冬。阿房
馬鹿身。花分。別。之。程。あ。あ。の。か。せ。か。し。湯。り。等

大八物野送別。客より小石植物園に行し
古物。既方未。略。く。手。紙。中。に。誤。報。を。し。り。り。あ。あ。改
書。く。書。片。似。似。と。の。會。議。を。不。為。形。一。切。中。候
此方改ト。と。あ。あ。誤。り。晩。食。を。信。り

捕獲... 天の功... 寺... 大...

書... 藩... コウ...

大八... 中外... 船... 家... 二月...

重波

茶... 舟... 地... 尚... 一時... 一首... 年... 漢... あり... 著...

古の祭料三回と供す

其の浅草奴うけと為ぬの如く此の如也

と云ふ大矢高と云ふ初初初津世と云ふ遊血と

思ふ妻と供す。大矢高と云ふ初初初津世と云ふ遊血と

古の

新起園庭細細掃除台築花池光輝也

日吉高直地地。小倉信也志義藤野中坊命の如

午前土の守。俄然同業組屋法着布仕後居

上野不忍池雨の如く信也。古の長信の如也

一。短杖の如く。古の如く。古の如く。古の如く。

山日縣秋

橘郡難波

百九十九地

南保馬

姉七代

川島河原
勧業所
藤島正徳
任高橋

橘本。登壇。演説。西仰。海相。の如く。此の如く。此の如く。

一。但。り。る。奉。酒。一。献。り。と。云。ふ。此。の如く。此の如く。

一。的。的。を。舞。も。古。同。業。組。三。百。種。類。の。如く。此の如く。

集。居。す。と。云。ふ。山。上。の。如く。此の如く。此の如く。

此。の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

人。に。本。郷。の。如く。此の如く。此の如く。此の如く。

此。の如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

南。の。如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

古。の。如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

古。の。如く。此の如く。此の如く。此の如く。此の如く。

説之北朝、権堂院、日官、安分、事、上、未、及、行、事、
と論を、其、由、案、を、其、意、を、法律、に、結果、を、案、を、
以、西、方、に、彼、を、其、の、彼、者、の、く、其、當、ら、れ、る、勢、
の、其、の、日、者、は、入、り、ま、つ、ゆ、中、他、の、問、題、を、成、さ、す、
切、せ、し、め、大、隈、副、傳、と、し、て、其、中、に、進、め、る、者、
中、野、心、を、包、れ、し、其、中、に、長、人、伊、知、の、縣、井、と、し、
の、通、り、内、國、保、安、を、其、の、中、に、將、校、と、し、内、國、の、
保、安、を、其、の、中、に、其、の、一、人、に、力、を、加、へ、大、隈、老、者、説、
と、其、中、に、其、の、中、に、其、の、力、を、加、へ、大、隈、の、
加、へ、し、と、其、の、中、に、其、の、中、に、其、の、野、心、を、其、の、
加、へ、し、と、其、の、中、に、其、の、中、に、其、の、野、心、を、其、の、

い、あ、道、徳、信、し、る、ゆ、ゆ、に、
い、あ、道、徳、信、し、る、ゆ、ゆ、に、

乃、日、く、近、來、の、中、に、其、の、中、に、其、の、
行、の、中、に、其、の、中、に、其、の、
也、其、中、に、其、の、中、に、其、の、
大、隈、其、中、に、其、の、中、に、其、の、

又、日、く、其、の、中、に、其、の、中、に、其、の、
考、る、其、の、中、に、其、の、中、に、其、の、
の、其、の、中、に、其、の、中、に、其、の、
思、慮、を、其、の、中、に、其、の、中、に、其、の、
其、の、中、に、其、の、中、に、其、の、

大山近作 位山心若き老之身を 植花の里に

任みまかりし

世白太歳行波多き物に 漢高木大山曰く 活き
正しき人あり他は 大花大匠の 徳者任りて
除いて他老人の 材方なきは 徳理の 福職なり
世に成次を 活し還るに 年あり 材十時を 繩引しは 活
此の 次は 知強き 或は 煩直き 日と 息の 朝延し
命信也 高義 縣の 事あり 任り 島 鮮の 勸業
銀福裁 命 著し 官 報 接し 材 あり あり あり
夜古酒の 活し 徳き 坊 師の 地位 地 代 坊 加

立業の 勤 郵 送 也

大坂より 可なり 東 林 石 山 寺 禁 行 景 況 小 浅 見 寺
宿屋 持 名 あり あり。 又 小 寺 失 跡 あり あり あり あり
和 平 寺 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
十六日 晴

し あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
小 念 信 道 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

晴方より 思 念 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

昨日書者青山湖所にマリテリヤの花を紙に
水石俱契く水注を田嶋と濁器に水の流る
梅漁りておろし戴きたりと白態態と身酌
りて 孫の拜飲き 昭如古山久に話をおとし黒濁
濁を其し葉を神 あまふ 又助神あり大山に
たきけの蛇書ける伊集巳代後より日新少
と辰野七三やとりとの面属を成のありしと一面
の不適尚又の来言 田嶋をいふ 柘植伯成の元氣
多し 傳言を枕えたり 大隈二郎 傳言をいふ
必ず部分攻撃をいふ者なりとて 果不純なりと中

亦つ果しと傳言ありと白く黒田を 老衰不堪事
但し捕りたりと中 ありあり 内閣前蔵なり
と中 果しと中 果しと中

西の傳言 歐洲近況 談話と舟の物語ありと中
し 重野の傳言 談話と舟の物語ありと中
也 叔をいふと中 秘言と中 道と中
此の伝言を對飲均宅居思向り 新一を賜り

十七日 吉 十日 雨
午前六時 田嶋所より二泊して往き行く 大正

大正
八十四

此段
十ノ
漢ノ

人カ事ミヤクシク此ノ其ノ雨ノ成

算ガ物ト長改書ト事九神ノ出帆書

舞子沖ノ事ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

十ノ新橋ノ事ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

采磯ノ事ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

其方上陸ノ事ト事九神ノ出帆書

赤坂一ツ木ブリキ危見ノ事ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

此ノ在ノ中使ガ欲ノ事ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

一面ノ物事ノ事ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

ト事九神ノ出帆書

千石防海を修せ申上州人より三普社中
 名吹勝海明樂飛揚守之張あり着向者への上
 官毎朝氣極何行の風動あり五年も六も毎朝
 氣極何の何心然く將上官へ信用と得易官へ博知然
 明樂正より仕官を修揚守も得易と云ふ
 毛利元教常侍在春芳泉月花山村極木共門へ行
 状の封一紙あり此の如く
 大原田島入来議其意は存せり申上物類
 白書撰一書に形あり長き一書と上行大いある
 十九日申上

父二親大人へ避世を度あり酒を以て
 日物久のり延層より古物あり申上○大説
 手取下八羽田極泉極く田宅
 木子木。親大人言事ありて獨酌
 二十日。雨下り的き
 如天氣好き色も少くあり勝と云
 手好詰木八切木長極ありあり申上
 一踏元の地代増し一伴の白傷比較り申上
 弟の事候事
 一是と云ふ能く改修申上二階倉建設

こころ

一切代詣修徳人の道し地を説くまを授けお
つ候人々極り了方

一月六地を割る事と改めし一万年の修徳を
借由とす一に身目一に心術の形乃吹
り候はれ候ゆ此之を名とす要する所の此大古
りて下り候

二十下晴南風烈

昔前塘切菅蒲見し行く小高に花をぬめり候り
昨年流氷なるの死し憔悴候ては小高に留り候花神

つれづれ海邊の向ふなる昔より買ふ

泡毛黒油より大海の向ふ書出に梅宗三郎と云ふ
者、古くは名を知らぬ島長命と云ふ梅餅と花菅蒲
の贈。場所則ち十代の傳下候。

井ノ、時

於山より菅蒲と贈。大昔十代に傳りて、
梅ひかりと云ふ事

其心海、吹来り煙火と物英皇即位六十年後
祝意を表す片を盛安と云ふ

大御新十代の子未若御命、日居況と云ふ、
昨年百廿六

之運命消極の如く、將來は亂運に對し維新の
入手之替更身之地、或は目以て要領を身隠し、所不
取也。發祥之地、徹頭徹尾發護保存を志す者、
萬歲上策と現在一萬二萬の儲財、實に輕き
もの也。

一言誠の者、或余試み防地之沿革を説く

九年七月晦日

金九千九百七十五圓五十五錢

地所拂下代價

一 金五千

地券面代價

一 金九千九百七十五圓

現地券面代價

古之通政所より施行せしむ取初、各土地券發行
と其有國債とあり成るなり、此二千圓と成り
を及し、老翁山位、地價の二成より世評を及し
金九千九百七十五圓五十五錢なり
此より十九年暮、地所概當四千圓
費用とせ、其年より地代増加とせ、二十二年より
壹萬圓以上、負債とせ、當時の價を
三千五百坪の地面、一坪十五圓と見積り、
千坪一万五千圓とせ、二千五百坪、五萬二千五百
圓より負債壹萬圓より引去るなり

四萬二千五百石

一坪二十石と見積れり千坪賦萬石と云ふ

三千五百坪とて七萬石あり負債一萬石あり

六萬石あり

利未未として一萬石に年五石
三月五日と浮ぶ

此の如き幕府の事なり中へ人知を測量するに
ものあり

今も負債は地面の負債なりとも其の事あり六千以上と
云成りたり此の事も金貨本位に事あり田に一日金銀
圓を成れり債なき事あり此の理より負債六千
石と云ふに金銀の物あり買得るに取らば事あり

金貨本位前

新田の徳を取らり明り多し事あり地は沙多し云成

に價重き保つなり

是邊一俵禪二番次と大池水に傍り四方十一楹

の家屋と軒一箇遠く林快淨く多き事あり

酒を賣り事あり此の所は杉木雨降り事あり

帰宅 杉木

二十石

酒を賣り事あり此の所は杉木雨降り事あり

閑宮に池萬人豪快氣知事壁怒濤杜
宇似憐流如影天邊呼雨一怒為

午後山川在粧進之錫印二十箇之杖及此舟有
き訪る者も主としてあり 船子行の因循は氣多
金吾傳方中口より出ぬるは物に種新なり 啓
史を編纂する

可市注冬靴後身爰に織る處に新物出する
乙卯の春より一と端書者出する

相大雨天神の像を物多拜礼

おやふゆふり又来以

井ノノ湖所徳々古に成法に行事

土方此より石軍の塵芥涌き揚り又新様木

と儀舞交と振り中皆成就の行し事

廿七日口禱 午後二時より午後六時見

午前初夜地震の程賑賑有る御之を看

綿田織

お鍋も長政沈世保り 美生書紙持よ小太ふ

お柳の柳子もいかに在るわりの事なり

大八音柳上泉張流るる事なり

大工の事なり長押の事なり

古孫晚方横田屋菜一條の事 古初屋の事 金吾傳の事
古孫の事 古孫の事 古孫の事 古孫の事

青柳の事 古孫の事 古孫の事

廿八日晴

於大八吉初行く。可市米信甚中をり
可市山包より靴取致す。

大土木長押と張床之間に一枚板を
水野廉平入米真佛山形の梅百本米深吐
序山持之舟風之御給不御す。おや少
年奴良長牛對話晩方悔

大八公伯人多きや。折るに細米改り
廿九日 陰冷 多風

大土木上段二間長押米床之間板を
麻ききる

三月十日。香山暮糸より
午後四時。鶏卵糍毛在。選取二十箇
米田伯

布哇一系之米布合併。就日本より
米田伯

一言。枕概も多し。方今。回
お分。勿論。是も。布哇。地。行。日。本。人。勢。働。の。た。り

以既。得。糧。も。多。く。隘。海。と。波。も。多。く。以。前。昔。時。り

米布関係。歴。心。米。の。對。決。日。人。の。相。際。も。不。交

何。米。名。も。務。卿。差。解。り。け。り。し。多。得。能。の

中野の事

楊乙トドも遊る濯起とあまのしそく七楊乙人のあまの敷
布哇の長きしつり布哇一島の相立たる米國の合併
の事日本、大勢多たあつた況や日清戦争の事
まふ米布合併がういふ事、眠る無之即ち二十六年合併
法條の施行の事、開通をいふ事、けりしり、今米國と
不和の事、他日し平和梅環巻の事、教
今日存疑在る米使の、氏の日七、台の、我政府の米國
國務卿の意見、米使の、日存疑、米使の、米使の、米使の
の意見、米使の、日存疑、米使の、米使の、米使の

東凡の事
雨降らん

此際政府の主義、確定する、黨論、著し、頃着十三、大方
針、取ら、執行、え、可、
以上西宮の事、君の演説者、刑、
多行中、承き、
對、納、於、此、時、次、切、定、
三十日

大八博友、早野、
月分、
酒、
平、

長政屋の傳宅昨亦大坂より電報仍白紙三紙に
多野五川迄は運動大宅不火之落一紙掲出
し

午後四時より鐘撞き若狭方面より大八已に金多傳
吉と在宿を絶て指田匠者宿あり是より指田
五宿并酒を飲し城廻畢夕飯多中より大八指田
金多在飯町人といふ理は証據あり至北前には
金多傳南にありは証據あり
指田大雨 長政屋亦ドール二十士座若狭大坂
是可なりと野原指田傳り均も是なり

大上とて床の板の板

七月丁酉雨

長政屋の面層より指田野原にあり可なりと
申す初傳り一五圓金と書あり

尾包より千屋材木包あり其切定
廿中廿初より廿日初氣より廿日初傷

大上とて床の板の板
五分ケキ書あり

之梅雨の概

於大上とて床の板の板あり。廿日初行り来。三十年一月

心弟之利子百五十二日破之

若德二三亦有痔之氣之尻の痛氣より水節痛平

持より余身新氣をさすの方論

其物久来の潜白之金葉因縁之調状を以て

思ふに鶏卵務又味糖送之記を以て

三言 如く時を先く而後らす

性水居之之来、大之澤美

性水居之之来、大之澤美 性水居之之来、大之澤美

長為昨日持指以て

徳子持之氣を以て林と云切断す之を以て

七取山と云ふも若徳と云ふ也 小西醫者

内事不在之、魂方上、徳宅之、来病の

小西氏来病、痔漏之、氣、切断す之を以て

之、記之、形、あり

魄方、長、病、あり、大、記、三、記、あり、能、き、事、あり

おとく、痔、漏、あり、之、減、あり、之、年、又、銭、あり

之、大、事、あり、痔、漏、病、體、有、病、若、痔、漏、病、あり

四日曜 晴 背暑氣

大、事、あり、大、抵、任、事、あり

年、取、之、福、あり、病、氣、見、存、あり、辨、若、山、法、あり

面、有、若、病、あり、七、年、以、次、あり、始、持、あり、第、一、根、あり

古版切立書
百回全持来

柔長あり大蔵に持地形養生 一月一食
十子中諸事教中一化として為年二成り或
一庵或ハ初ハ全治ふ事由ハ三國圖等風
床中ハ一服ハ一初原ハ一臓ハ起り醫
臟ハ病氣候ハ一種ハハ輪轉也ハ一辰料ハ
鳥肉三四回生乳一辰ハ一日ハ辰料といふ
物運ハ浦見丸らしりハ下流於丸ハ送別
ハ我ハハ存得若次柿崎ハ下流ハ丸地ハ一辰料ハ
ハ辰料ハ丸ハ下流ハ丸地ハ一辰料ハ
来者物候ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ
物運ハ辰料ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

五。時

太老ハハ引考行ハ家子ハ一辰ハ梅林親ハ丸ハ辰料
ハ辰料ハ丸ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

大八管水井郎ハ辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

水野廉平ハ辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

午後十時柳江下新 陶器ハ辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

向島指本印ハ辰ハ一辰ハ一辰ハ一辰ハ

之地を略す所と云々

甚厚に主創成根元より一掃せられし不況を

安重以四節の多し地方より徴税困難且新税増上

業税の中甚情に且郵船會社亦多極端に赤字

航海損毛を立持らざる中蔵に云々

中村倉の馬場新八友を曾と信し中村屋に其の

代り星野より切取先之書に舊出箱を令し火

振り多し惡化惡解

七日

昨朝の悪候より心緒不佳

三浦吾より中津野の活古信山岩川新宅

三日

左近あり中津野の。建具倉外廻りの板戸を

取付け申出認蓋し今日仕上り

八日

忠告より車物より七日の夜男誕生且此者傳信の増え

し又若くし沙白の大學卒業名簿證書

此後より仍忠告并忠告の悦ばれ上り

可なり暑中休職し初七日有るし此を新説

と云々出

金手は赤束巻

金手は赤束巻

金手は赤束巻

金手は赤束巻

金手は赤束巻

金手は赤束巻

金手は赤束巻

金手は赤束巻

金手は赤束巻

小野山ハ十以上有リ其ノ西東ナリ其ノ物ナリ石懸長
醜身ニシテ其ノ名ナリ國千田在即成齋岸田
考ルル本名及之不系

午收四時ノ午ニ里海ニ身ノ高年二月十日小
佛嶺猪獺ニテハ猪獺ニテ還幸ニテ印在
用ニハ猪獺ノ山國鉄在印佛ノ猪獺ニテ
當時犯忌ニテハ身ノ猪獺ニテ身ノ猪獺ニ
猪獺ノ里海ニテハ身ノ猪獺ニテ身ノ猪獺ニ
彫刻設置ニテハ猪獺ニテ身ノ猪獺ニテ
坊系抄田滋以猪獺ニテ身ノ猪獺ニテ

九日
竹梅抄千孝子内宅

阿徳云より乃身猪獺ノ氣ニ養生ニテハ金快
山ノ竹梅抄千孝子内宅ニテハ猪獺ニテ身ノ猪獺ニ
身ノ猪獺ニテハ猪獺ニテ身ノ猪獺ニテ身ノ猪獺ニ
乃身猪獺ノ氣ニ養生ニテハ猪獺ニテ身ノ猪獺ニ
午收四時ノ午ニ里海ニ身ノ高年二月十日小
佛嶺猪獺ニテハ猪獺ニテ還幸ニテ印在
用ニハ猪獺ノ山國鉄在印佛ノ猪獺ニテ
當時犯忌ニテハ身ノ猪獺ニテ身ノ猪獺ニ
猪獺ノ里海ニテハ身ノ猪獺ニテ身ノ猪獺ニ
彫刻設置ニテハ猪獺ニテ身ノ猪獺ニテ
坊系抄田滋以猪獺ニテ身ノ猪獺ニテ

古如身
推回...
第一...
...

十日土

...

可二... 省成... 下條... 勝伯... 勝... 馬... 川村... 向山...

手... 物... ...

...

大惠... 十... 可... 大... 内... 年... 言... 英... 黑...

龍印第二
 形機を辨
 黒田松平殿
 品史化念
 水

今午年迄出た事
 皇帝陛下
 夕暮り
 列家族
 十二日
 於伯
 大工
 福計
 とも
 来

松長
 邊
 月前
 列國
 其
 十二日
 野
 午
 徳

屋宇修葺者未幾而火一及博多常一節口古坂
日有出見之及書物等第一節口古坂日有出見
烟多一節口古坂日有出見之及書物等第一節口古坂

不天氣少青山暮色延川

十曾晴ハ十四夜

今形形鐘火中起了午前七時始先所講印松

島町矢火三ノ丸燒三四戸才燒之注火

午以國本黃石所とる之ノ初段ノ浦園

起坐腰不立之等々元氣始好凡月堂氣

餅坊也。大島正人夜敷五子園之盡切也

此中村耐ハ二萬圓之成ハ一ノ移住

常盤橋ハ多ノ理髪操成園ノ十柄巻第三

本ノ電燈ノ雷吹驍而始末ハ天候少ハ木復

所日遠去ハ其外ノ洋行長ノ御旅ハ交雷吹五

段初者ハ暴風白雨ノ所樹上行人打シ絶

ハ其ノ事ハ極ニ新ノ所ハ也

急升ニ進割紙師坪何所位之貫元ハ二万

圓位之常用ハ片ノ十ニ家ノ山ノ買人十外

何道一換人ハ七春ハ何也

兜羅子三枚、
雷時より雨、
十者、

古海、
物置北胸、
瓶、
お智、

山下母、
保科、
十、
お智、

山下母、
保科、
十、
お智、

おやう山々多処生薑漢粉糖坊主あり
當所より著し卒業し祝々祝々お竹銭末
母は推し、亦爾友信一、洋食の記を多し、臨三
當院の物定、保科の家運、甲け目金多し
十七日雨晴、午後、お水大雨
午前出、九鬼樞密の信、山高信、一、
税所より、鹿兒島、何の、第一、創設、鎖金社、
解散、著し、話、多し、吉井、有、花、著、
園計の、換、生、大、之、信、和、二、千、因、
物種、伸、臥、を、所、不、在、書、君、出、し、
あ、公、之、一、来、月、若

比世既

金杉、治、湯、方、
金杉、治、湯、方、
金杉、治、湯、方、

會、黃、封、の、初、氣、晴、
會、黃、封、の、初、氣、晴、
會、黃、封、の、初、氣、晴、

吉、藤、乃、未、指、
吉、藤、乃、未、指、
吉、藤、乃、未、指、

十八日曜

早起昨夜雨之甚非常之大雨之屋瓦始落
未之睡乃若予之境甚苦

於故而之中乃身軀強弱有年之誠志欲之
新治友果曰我人必思居之乞白轉之
通之按之

晚來張濬馮 余亦張濬大矢之志也下八

我之於伴之由之談且的遊之二三首詩
馮直隸之人之居此堂之身之人之
切在次之也

可希于七身之在在之者之十九之流
之由有之成之也

十九日 於雨之於晴之 慈者今日之甫入
於新宅之戶之門之 土藏之尾之第之樣之

尾張町九尾之寺 西洋好帳之 證安八田之

小兒之遊事之田之沙之 十四位之
三田之新經師之屋之穿擊不之為之之車之
於之皆均完黑田之不之有

清國公使裕庚氏造之入來之節於轉之垣原詩
之末訪作未之了之月日通沃羅庚斷村系

種内証考

予三十年日存の飛く何如障公使の時より南沢
を為し考の徐昌祖公使の時より同十七年
朝鮮の日の清の四の兵改の際一折節穆然
昌公使丁憂其代任の徐昌祖東京留時
徐公使の心配日存の戦闘力に常務と確
認改を手に配をしと唯法固と事ある十年
早いより注漢の説のみを外務卿井上も
平和説を拂うが物然公使の時より一為國軍
端を開く其際大和と巨古もその歐洲の南

人あり仍る幾有と考念せしより直言して政
府の平和説を死す國民一般の思に戦闘
論を日増激初の勢より政府人民之際孰
と決定するハ主義我を不致る府の人民
餘りは是勢を極め政府敢て之と念する
中一日徐公使を拜し其折の極端を以て具
日本政府の真状を悉く詳悉に中堂に
密報せし何事の手段を賜て探偵を成
す其苦意の時より抄り其勢を取れし命を
自らの言證を其日存の通書に頭懸す

此は其後其れを到底未だ切は免れず
永年日印は格うりぬ日印人之知也
其人を裁判友と勅の人は安心し
北人と語へし后日ある平和清國
の利益なきに而日本に利益ありと思ふ
徐公使の分して横濱より東京へ朝比奈
閑水と訪る政府事情実を擧げ依款
せし閑水深く配慮し日本政府に清廷對
しと決て戦闘の惡意あり唯朝鮮王宮受
後之邊から止まのみ事ら平和主義我の取

の樞機を疑は奈ら洋悉現場日本政府に北
京接本公使のるも七十日と電報を往復せ
と確りしより事横濱に徐公使の密告
り徐公使直天津通都白事申堂より伊
藤大使の迎接の上表を成り与人天津談判
自出た者もせし偏に徐公使幹旋の力頼
り新し當時日本駐在公使其人ありし
戦端を開くはきき清廷當時俄法と伊魯
安南との件を斡る兵休を聞くるは心路火朝
野人心を興憤し海経清廷の利運ならん

之友、白二十七年、之役、其、慨、歎、不
堪、汪、鳳、藻、公、使、を、人、西洋、學、問、長、
信、之、年、駐、劄、由、朝、翰林、學、士、と、為、り、昇
公、使、を、推、選、若、し、來、劄、を、在、之、有、事、之、際、
黎、庶、昌、徐、承、祖、と、違、ふ、不、可、り、又、李、經、方
も、及、ぶ、不、能、可、化、之、清、廷、不、平、之、事、經、方
公、使、を、方、を、下、邊、解、任、を、接、任、し、白、汪、鳳
藻、公、使、と、成、り、日、本、を、事、と、雖、心、中、に、小、國
と、蔑、視、し、政、府、に、國、會、を、辯、突、と、冷、笑、し、白、深
く、東、洋、に、大、勢、と、自、覺、慮、せ、り、朝、鮮、賊、黨

起、清、廷、兵、と、牙、山、と、邊、也、日、本、回、り、五、十
六、年、の、兵、と、繼、り、世、時、汪、鳳、藻、全、權、
し、日、本、駐、劄、に、任、せ、為、り、和、戰、の、法、方、才
を、在、り、世、時、黎、公、維、公、と、い、ふ、あ、り、白、牙、山
の、兵、と、撤、回、し、白、朝、鮮、政、府、に、得、喪、の、理、論、を、訴、
へ、事、何、方、と、雖、如、此、失、策、と、不、可、り、已、に、北
洋、艦、隊、と、日、本、王、大、臣、と、親、睦、を、歡、せ、
し、事、征、方、に、韓、旗、を、此、事、權、懷、瀋、陽、
李、の、中、心、と、す、り、我、の、二十、七、年、の、及、清、
廷、牙、山、と、兵、と、邊、也、日、本、の、政、府、十、年、前、と、相、違、

しるが如く、然るに、準備と為し、其勢、到底止む
所なきを以て、仍るが如く、汪公使、注意せしむる
公使、恬しく、顧慮せず、微笑するが如く、
よき若く、遂に、我々の言、一切、聴納せず、世に
彼、来り、公使館内、公使、喧嘩、実弟、汪公使、甚と
劉子真、護る、与人と、用い、事、謀、の、み、ゆ、り、
一人、七、関、涉、せ、ぬ、が、公使館、を、撤、回、する、案、
を、謀る、謀る、他、人、と、亦、行、ず、二人、を、密、謀、す、
の、日、本、に、武、備、充、實、清、法、國、の、侮、り、を、教
み、せ、り、、み、せ、り、、小、國、何、事、が、あ、る、人、を、畫、身、交

甚く、あ、る、が、如、き、景、況、を、な、ら、し、當、時、兩、國、の、交、歡、を
破、り、盡、す、數、萬、の、人、命、を、失、じ、數、億、の、財、貨、を
靡、す、汪、公、使、の、派、り、汪、公、使、の、清、國、の、金、權
公使、の、和、戦、の、枢、機、汪、公、使、の、方、寸、を
存、り、汪、公、使、の、匈、年、を、兩、國、開、仗、の、不、利
を、認、り、し、清、廷、に、報、せ、る、が、大、山、中、の、事、を
何、れ、已、往、不、破、清、國、の、時、の、事、を、免、し
心地、あり、し、し、る、が、又、し、眼、の、み、し、事、中、の
内、國、の、存、り、國、の、存、り、故、に、存、り、事、中、の
言、ふ、之、徒、然、視、せ、ら、し、只、目、の、み、の、必

我子厚遇をよみ親信しむるは
徳を大いに一とて之を徳あるに

昨年書中堂の馬関を有るは天津を
市と盧永錫と目しと劉慶珍の
みなりぬる大唱するは盧永錫を相視
の一なりぬる日存在市にありぬる
ありんぬる畏懼する中堂のち一なりぬる
劉のぬるは許するぬるぬる言
市と盧永錫の馬関を陸行せしぬる
劉慶珍の上言のぬる日存在のぬる

大なりぬるぬるぬるぬるぬる

老を此と誰と不識將來を誰と
おんぬるぬるぬるぬる

二十日晴 暑く

大なりぬるぬるぬるぬるぬる

近年里内より佳あり 平和梅、極上書、梅
美花方出ありと 報さし仍るぬるぬる
ありぬるぬるぬるぬるぬるぬる
午は書あり黒田の物麻布四はぬるぬるぬるぬる

ソリヤス上ト、後ト、子ヲ、紙製シ、用紙ヲ求セ
思、向、必、モ、ナ、テ、西、京、兩、書、方、印、之、深、淺、也、
二、冊、徳、大、白、紙、紙、長、之、上、度、也、之、中、也、
十、字、区、区、各、一、半、最、外、方、積、成、平、和
物、造、裏、之、好、材、料、之、一、部、投、子、也、
勝、伯、之、賜、之、換、之、一、部、封、供、也、
授、奉、妹、之、名、年、之、北、西、之、物、身、一、部
本、贈、之、代、也、之、名、也、之、徳、也、之、換、也、
之、名、也、海、子、山、縣、大、山、西、郷、一、部、
親、任、長、之、之、書、之、印、之、方、之、不、也、

祝、松、越、納、於、方、印、之、
其、書、之、一、部、不、也、
可、不、之、方、印、之、
之、中、之、
十、之、休、也、之、
廿、也、
大、二、三、人、之、其、也、
之、基、所、也、
之、里、也、
之、十、年、之、大、也、

吾手創製之表紙を貼し、此等、漫阮す且与
冊を二讀す

二十一日、午後、時頃、劇、辰、終、長

大業、其、基、北、壁、板、を、張、り

午後、長、時、來、明、り、伊、多、保、刀、法、を、引、日

古、次、を、修、り、言、ふ、〇、六、八、月、堂、行、き、蓮、子、を、買、り

糶、所、五、月、見、多、桐、下、野、を、買、り、田、老、松、樹

子、時、地、震、電、信、線、長、竹、白、之、辰、不、具、修、終、矣、り

其、得、定、可、二、帝、山、下、行、く、〇、古、藤、來、地、在、前、地、程

二十一日、炎暑、大暑

上、御、百、七、十、日

祝、三、早、起、長、政、三、伊、多、保、行、を、送、り、上、野、野、を、行、く

大、工、与、人、來、り、其、基、所、竈、を、し、板、を、張、り、多、く、掃、き

不、潔、物、掃、除、陶、器、の、毀、傷、物、四、斗、掃、き、二、日

出、身、行、り、二十、年、月、炊、婦、あ、し、任、中、在、り

山、井、兼、文、入、来、り、お、り、お、辭、り、貴、族、院、を、送、り

尚、友、會、研、究、九、層、寺、の、倒、像、を、多、く、お、り、出、り

午後、後、傍、伯、を、初、い、思、得、り、修、道、の、書、を、看、り

浴、を、且、洗、身、に、元、振、り、梳、り、洗、り

清、心、使、り、菓、子、を、一、箱、を、贈、り、送、り、持、是、之、謝、意

を、修、り、其、秋、六、八、代、華、心、使、り、七、十、日、宴、を、お、さ、す

物事

晴之呪詛は一日一真青山の墓系花を
供ふ物迄推南宮の如く買ひ物

二十四日炎暑八十四日

茄子と白く南宮の如く

或る者三人来其意の如く石を起し其

を細くは清く掃除新宅を築く所を以て

元年を移居の候所とす候に未申申候とす

慶神裁とあり。○ブリキ半角の如く不來可遊軒

板大八の方向を供ふり候に其意の如く

其意

將來の目的も確定。黒田、吉村、等も
二十日八十四日

大六二人事。用は屋上軒先の板を張又、リ浮来りて

軒先を成就し、其方丈あり、壁の草を除き赤土

の内より板枘を定めて園庭を敷く

大八の勝伯を訪拝意を乞ひ、伊豆より、其意

あり、高野を訪ふ。○其意の如く

羅漢堂を築き、朝武生を、園庭を写真とあり

皆次第漸駘。○其意の如く、其意の如く

大瀧院を、其意の如く、工業、其意の如く

方物成仁
与者必書

松乃有相
言訓布哇仲

又部有書云、
杉家親名公債六萬圓、
初自池田銀、
極高、
杉家親、
歸途、
二十、
土方三人、

裁、
行、
山、

之、
可、
行、
山、
後、
若、
自、
覽、

廿七、英日通商手続書

土方二人あり北境之産其ヲ除き赤木元々埋い柏木の
枝を以て掃シアキヤリ物ヲ裁キ其方ハ片の限リ

置刺事ヲ新床ヲ制リ大工一人

滋女高町ハ多ク考ヘ伊豆條ノ均等點一足上産

二十、英日通商手続書

置刺事。地官あり上海ニ一因官を要スベリと云

大工二人本産敷物ニ板屑ヲ新クシ竹ノ又ヤ

物干竹ヲ建ツ。ハ此物敷ニ竹ノ干七枚

平河町地租并 地方稅布稅收納ニ因テ十ニ

庭前築屋端ノ萱^{カヤ}枝ノ洗

予前大瀧龍花ノ末子業学校創立ニ有テ其部有

シ其部有部多産ニ其亦不後以テ其部産織

ニ工業学校ヲ集羽ニハ米海ノ以テ才一他ニ是利

以テ但ニ是利縣ニ米海ノ布ニ多ク其縣ニ進出方以

其部有テ其業ヲ産ニ其亦不後以テ其部産織

物産物ニ織物ニ其部有テ其部産織

但一ニ十ニ其部有テ其部産織

其部有テ其部産織

其部有テ其部産織

其部有テ其部産織

廿九日 八十六分 午後雨あり八十分減す
 大工一人来り車夫都立の小屋を壁と切り換へし
 是より新築八畳と三日を費し中劫十首と拂
 午後雨不行来り暑氣如安と減す。標草廿三人和
 可下印の如振る御。指の海匠未と投宿所。七湯と
 巡回遊水と舟と流り如く。玉極元と氣と切也
 齋藤信一より新築の如

三十日雨

早起し晴し新築と切し常徳院様と依す

可下印の如大坂に赴け侍僕未と自存持と走らせ給
 と買ハし心持大八可下印と三三番一七番と因宗
 御舎と之故可下印と教海す

大八は堂石丹じ南築向也和身地交五右坪若
 ありと臺物と一見改札あり。お徳未ととらゆり
 四辻角駕を改帳付取代四十四と辨
 三十日晴

梅林来美始り自中河六日分と大工を分料
 と流す。平山洋服店より和十廿四と流す
 可下印十所出と身截移山上河と大坂と下也

三山七千餘位
午初九時吹方板
標草廿五人未帥內揚除
草州おろこみ、晩野長根方物

八月一日晴

特命令性後使物種伸臥身、生ぬ、以出考、
大八七七、風、三平、疑、
大、
日本、
外、

伊香保行

第後精疑心、生、
杉、
此、
三、
午、
大、
伊、

定長十石馬車中至五時定切流川
山休人力御川一白冬山暑氣融信者皆尚乞
着長治出外地花河原之出與一也。

村山定病者中尚流人之十四日之人
此和長政之也之能之成。

呼晴 八十七日
昨復年夢覺國府遊去

盛美矣天雪中景深山信與美人圖
和根川鮎村中本二正之夏小鮎出也及谷山生
身之夢話長政文湯元行信來之京都人皆也

傷之暑氣多。因休來話沼田利根川遊之話

家信之也。半路中一時抄本按舞之末後標
此炎暑八十日有伊多保之結成之也。

長治之也。小飲。此之毛子之計之也
賢好一酒就床熱氣融信及身之冷一枕之
如之睡十時也。雨身微之冷氣之信也。

身之而 是也 於 七十年

昨復雨而雨起乃涉暑感十二日之減之於
之口之食然之供之冷氣七十年之九所
長治來話中話之也。此之也。之也。之也。

去乃宮内大臣意見書起草一七冷一凡六
清書之也

午好一活而所山色如佳。片々亡命命日
祭祀之心坊々 新鶴野米天ふら心いん正業
古く去れ七晚天山と眺め詩的 午前九時
獨坐又長唄身困心恋留詩成書未了一枕

所看

後孫伯魯子不表昨言午好一活北去永く初氣
心曠神怡 高き活然不表今即言午好一活
天保九年二月十日也 一福叙正三位多事

之性生より明治二年以前に在りて友と交り
其後及都府より通るに由る 況三年物以言
如京に北中より通る者あり

下り

其れに所林より目覚め有微辰四時天
明一活。午前初奉極解子孫活計を打つ
後孫伯魯電報より吊詞を以て

伯魯云哀悼と堪へる残念

二十八年八月二十日午前七時
後孫伯魯夫人殿

之為大いり家信来に子平安安
京都因又三三の為物金材未尾に抽金
苦みし辟苦の上余土おりあり
可成初に電教を打、是神三出前カ
安心
若端の通の即の書面より物状を告
及、湯元端歩内、子九斗、及、
既、其、對、的、相、食、好、難、不、法
と、於、大、全、而、大、也、近、者、以、其、多、象、也、
と、P、也、

拜啓大威酷烈之節

西陛下益御機嫌展敷程遊

御事奉茶加具を随与

周下愈中勇健中職之段不堪

欣喜之至陳々

御降京數月、後為御殊更、勤少、御之

之段、下、陰、相、存、不、申、上、片、其、内、不、遠

還幸、可、移、為、在、尾、團、也、氣、之、別、而、也、堵、世、事

工、也、也、我、折、行、突、然、之、申、分、之、長、得、也

例、之、積、年、之、舊、文、又、之、官、内、之、仕、之、罷

若も其家之事如不憚借支愚衷壽星
其次第と此後靜因

御停泊の被為在り申す同所住兵之儀一位
徳川慶喜儀戊辰謝罪以來閑散之地
三年間一日の如く恭謹起居其次第
以下自輕重可有之仍包与回

御駐蹕の由序を以て特々拜謁被仰付在
申す本人感喜如何斗世々人心も感動
有事と拜存其実故上於老疾存生
中時少生に申聞其次第有之に備此度

靜因

御駐蹕と千歳下時之好機會と申す此等
閣下限極密入内身其家と申す政
官と申す誰人謀り申す目下戦後
經營中外交財政等政官之職務
可有之に得其天下蒼生を安撫し務る人
心之收攬は好む事と申す

帝徳第一の御勅を又

御責任と申す此等之時方り從
一位相湯と一事の同人既性之障故也

消滅一天下寛仁

御美德之公揚仁可申將來

望運之理替之空係之事之若慮作之

東より 湖の南舟中成竹也

死に浮た思者の一得不顧狂言

吐露衷情平東之世是所成子

御伺方属事奉得委意之御取捨

讓

高の在也悠慢不道

明治三年八月廿日

東京 官島誠一郎

京都御所

土方泰山上人閣下

不詳

七月廿日

野越一沙路及谷山生古跡

中帯小紙の如林未之と記す

子母持御子吹方自先院殿

鯉頭と傳へて改て

三田乃沙

初根の泉
けねけけ
なまなま
鳴河

天子御幸
御

新宮の御居伯耆山に五十坪と宮の御葬所
月夜に葬所を暮夜を御所と事なり
杉方のお宮は田原の御所を葬所なり
しるべき御所を御所と川にありて洪水を
一様山洪水伯耆何處に在り
杉方と財政大臣の御所なり
前途徳教
天子在京師百の祭に百の祭と云き御所
と林苑に止り今日百の祭に御所なり
御所なりと御所なりと御所なり

杉方飛御の御所日布の御所と云き御所
鳴呼久し御所なりと御所なりと御所なり
御所なりと御所なりと御所なりと御所なり
土儀有りて御所なりと御所なりと御所なり
道なりと御所なりと御所なりと御所なり
入杉方お宮の御所なりと御所なりと御所なり
しるべき御所を御所と川にありて洪水を
一様山洪水伯耆何處に在り
杉方と財政大臣の御所なり
前途徳教
天子在京師百の祭に百の祭と云き御所
と林苑に止り今日百の祭に御所なり
御所なりと御所なりと御所なり

昨日
昨夜の御所なりと御所なり

此中伊藤
の秋花栞
標のい花
神靈の巻

貞光院殿三十八回祥忌仍と兄弟分祀
と此等正宜とお供えあり 洋漁焼く鯉頭
林檎 鶏焼 鰻焼 鯉汁 鶏汁 鰻焼
長次と書し、ビール三瓶と供し
大八と端吉来り可市七月三日出度八
月廿日おのり大坂着之と神戸出度四
日帰坂にせり。〇惣乃るるるハカキ書し
松本梅屋手来り 採藤汁以半と湯元
黄金院山蔭堂山休
惣乃る長次對的六と解お銅園殿
あはれ書し海うらこ

宿主人より 穀二足と云贈 あはれ書し海うらこ
今日も縁孫鳴か合子青山へ入りお供え
九日晴、八十分非快所
昨日一泊長次と尚元り尾崎忠治三との書
り金中と書し
午の梅屋手来り本城坊 採藤汁以半と湯元
富貴切名出度 神仙生活只長
霞利亭 茶如三平 悠庵中山是我
家
長次手廻り下りて一と多 惣乃る長次と書し

紙幣流通高
 七月廿三日八月一
 日越下政府及銀行
 紙幣流通高
 千五百二十八萬七
 千六百十餘圓
 前日比
 政府紙幣十九萬
 六千四百餘圓減
 銀行紙幣六千
 三萬四千三百餘
 圓減

村松も着る播磨湖の鮎と云ふも贈 鮎の者
 りて鯨飲温いんを喰はれ怖れ物外十勝
 次目免つ流能後風邪と氣味

十日晴

式

性晴秋山家備思如掛 野流。家多ノ邊
 七時七政家族と掛取下山園作日行 野塘
 ましきり園子一園向會

甲新子と久し治じ八月ノ第財政に件也
 一償金繰入公債賣却遣繰と云ふ財政に薄難
 一國臣倫七國家の實也也

一億二千萬不
 言一

一外債の公債身賣極と付と手失休と云ふとあり
 利子備整に於て葉債拂と約せしむる公債の賣しが

一昨年七千萬の募債あり募らば四年交五千万の
 債あり借金を好むに於て七千万を好むの内閣

一関稅增收の成り償金を省濟するに成

一金一銀廿六銀價の甚し海外銀貨約五千万

海路年光

米國一億五千万弗の銀を要らんを 銀價を下げん
 輸入超過九千萬圓二年繼續其日本銀行の正債
 準備皆無となり日本銀行自身代限りと欠けざるべし

海州港
 七千二百七十二
 里子安出
 の大連

一 外高貯る千万し 貯蓄を要せしむる多し 其を換
 せしむる日一億一千万之金貨切を若干抄也

一 制限外産行一千万圓而年金融緩和を以て金利引下
 げの処置をせむ

一 一万圓酒税一千万を降るも 財政安きを以て得五千圓
 之を償ふ價金繰入るも 外遣債の是也

一 一億三千万の負擔重しと言ふも 杉田角良を以て
 日新の爲 苛賦誅戒 辭せざるも 如何

一 公債の存在は 借金の感心を生ず 杉田角良の如
 く 健全なるもの

一 豫算三億 漸く其漸くは 二億五千万と成るも 財政
 の基礎をきまざる可し

一 歳出三億五千万 歳入一億三千万 身一億二千万と

不足あり 國家に存立し 借金の藉を以て 外債を以て 借金に
 一 歳費一千万 田及道に費する 日増しに 移す可し 杉
 田の語を以て 津下友成

一 世界現在 借債金貨五億 四千三百万 円 借債四十三億 三
 千六百万 円 其の如く 日本は 如何

一 清國外債 屬し 夫れ 之を 減らす 財政を 健全に
 所 借債の 爲め 如何の 結果

所 借債の 爲め 如何の 結果

松方曰五郎
皆流也

一 國銀鑄造一億六千万國內流通之三千四百萬之不足
 海外流通一億一千一百萬の多きこと
 一 米回會銀甲億弗財政廳に大損を不顧之を責むる人等
 宇内報信影響するを諷するなり
 一 政府債務は漸く増へる銀貨を交換を拒むべし如き
 金貨本位に有名なきは債を列國に生かすや必す
 一 准備金一億二千万身八九千万を銀貨と交換して
 何れも幣制を組織先成思ふなり
 一 加税重税風説噂々万衆惑亂河臣憤慨治るべきなり
 財政のありたる國家の大患也

十月一日

新税二千
四千万圓

一 英國移殖の債百十三萬の購入し日本債九十七萬の
 為中利息金貸拂とのりなり
 一 十月十日迄新金貨鑄造五千万之不足海外傳來の
 銀貨八千万圓の時金貨内國にありなり
 一 株式公費万七千餘に令社解散比に踵を擡す實業
 菩薩商法内國に長者に信者に福を降しむなり
 一 餘算三億の増税と舊債の熟しを射りし共六千
 萬の財源を求め可なり是其の松柏に福を授け
 一 酒税十圓千二萬圓地租千八百萬圓増税
 新行きの大に減を削減せしが財政を難し

清々ソッポクハ白眉體ノ潤キ予前ニ流汗セ
洗テ未ダ後寐吊初キニ葉法ト一葉中
新ウ糸ノ寄進材柄上抵リ

午後予睡ニ所同キト休息揚上漸キ流汗
後ハ予未ダ寐ト寄進材柄上抵リ

無邊休ト信中豪大鳴珠彈捲息濤
雨事障琴榭靜夜秋風一也身猶
為

家古ト坐テ) 晚方掛背同心結酒元ハ出掛
金市より不雨降ハハ日美神社ハ美法茶飯茶林

而歌言酒元ハ都步坊金流度ニ過キ
物電光一時遠雷有也) 日美神社ハ
村松ト呼ビ晩酌ト交男子ハ山ハ酒元ハ
捲中ハ不電光以財金火天ハ飛送リ
東風鳴交リ一坪一吸ニ余断會元
雨乃拍湧一) 日美況セヨヤ) 雨亦流死
之ハモテ子ノ酒ハ飲テ鴉計ヲモ腹氣ヲ鼓舞
ト其内大狂一吾ハ盛哉花露湯中ハ心
ハ一飯吃飯拍撲夫ハ流ラセ 此水ハ夜心
為一飯ハ不棄。此水ハ流ラセ) 子思進)

吉野噴染如蒸氣

今朝之性所若者如蒸之需初之遠近也
如洗午前亦改湯先行運動

午後一洗お風氣修用戸

夫ハナク者ハ一室を造リ
然夫と云ふ事ハ

真向布帛の單物ヲ買ハ仕立之由ニテ

暇分長政取中ノ新袍ニ湯ヲ入ルル

陽金造例ニハ此甚矣
上ノ字ニテ

之切取ル所也
古ノ如ク

橋上橋下南側
十有八九行街
陸海取之

和坂川出水
境内ニテハ
相架カテ

十三日晴 午後蒸暑 雷雨

輕沙如例
有者ハ

此中驛園出驛驛之節同人亦在當之致礼奉本一向
候以深々拜渴望仰白事々々々々

午好意多里々所望其清書

長岡茂美松浦厚々晚来々々々々々々々々々々

之坊々細川侯爵々々々々々々々々々々々々々々

之殿々坊次内舎のり携名り々々々々

空山細名々々々々々々々々々々々

十考時

少子空山後門地階物園山登々出々々々

山川の景何々有作和松浦徳洲歎

相馬椿名群岳々魏芸輪白井昔人非我來

破破向當身事唯唯有香山杜宇飛

以日晴所冷氣道見秋

午前千金良々尾崎松谷徳向々坊白徳也岩崎

氏有觀刀油々由來々書々能名々坊

々殿々氣々々々々々々々々々々々々々々々

此乃々々流瀧環志略所出

晚登々晚的々々々一法就有終夜雨有々々々

政々々々々々々々々々々々々々々々

十々々々々々々々々々々々々々々々

御宅存物と人力に似て種穀七帖書
金市出家之林檎と雲の混同の別
守世と人との言ひと成ると事十二
道有年及所一海軍と之の事一
夕陽上野着花之者一雲と成行物
完結と事一。松長政乃本

伊藤の老幼と事一
獨露而帝一層包一併一歐洲目二問題
と知一獨露と事一都と事一越と事一東洋
と事一獨露と事一英國と事一孤と事一也と事一

伊藤の老幼と事一歐洲と事一物と事一然と事一物と事一

今の高橋と事一本と事一迄と事一流と事一中と事一最と事一

伊香と事一持と事一金と事一十と事一國と事一入と事一費と事一孝と事一日と事一均と事一花と事一何と事一刺
九國と事一

日本駐劄露國公使新奉旨朝鮮駐劄露國公使文瑞

新任露國公使八月二十四日全權公使男爵ロージンロセン氏

昨日午前七時参内謁見而陛下

スハ

露國臨時代理公使アレキサンドルス高氏朝鮮京城赴任特別謁見

昔年後此時新橋考車二十之神戶出帆去海丸亦在

立ハリ氏
日本ト協議整
カハスナリ
スハ
スハ
文瑞自より將業
如何

九月十日朝鮮駐劄公使ウエハ一氏帰國ノ途ニ就クヨシ

